

城下町絵図の研究視角

—城下町研究と絵図研究の環流を目指して—

渡 辺 理 絵

- I. はじめに
- II. 従来之城下町絵図研究
- III. 従来之城下町絵図研究における諸課題
- IV. 城下町絵図と絵図に描かれた社会
- V. これからの城下町絵図研究—大名家に注目した城下町絵図群—
- VI. むすびに

I. はじめに

歴史地理学会大会において、絵図・地図がテーマとして取り上げられたのは1978年の第21回大会が初めであった。その大会での発表内容をもとに編集された『地図と歴史地理(歴史地理学紀要21)』で、織田武雄は研究史料としての古地図類の重要性を説いた¹⁾。

その後、第52回のシンポジウム「歴史地理学における絵図・地図」が開催されるまでのおよそ30年の間、絵図・地図と斯学との関わり方は、方法論的・史料論的な議論を通して、その様相を大きく変えてきた。近年では歴史学、考古学、建築史学などの隣接分野でも絵図・地図の資料的価値が認識されはじめてきている。こうした時期に、本シンポジウムが開催され、「歴史地理学における絵図・地図の意味を再発見」し、絵図・地図を「活用した新しい方法論、思想論」を目指す意義は大きい²⁾。

再考の対象となる絵図・地図の中には、当

然、城下町絵図³⁾も含まれよう。早くから歴史地理学の主要なテーマとされた景観プラン研究や景観復原研究の中でも、城下町を対象とした蓄積はもっとも多い。その研究成果は、しばしば隣接分野でも参照されており、歴史地理学の共有財産としての地位を築いている。これらの研究では、城下町絵図が中心的な役割を有してきた。それゆえ、絵図に関する議論も多く、その利用方法や分析視角は、城下町研究の課題に呼応しながら様相を変えてきた。史料の利用法に対する見直しと新たな研究手法の確立を目指す動きが研究の転換期にみられ、それがより一層、城下町研究を推進してきたようにみえる。それゆえ、城下町絵図研究は、城下町研究の動向と密に関わりながら進められてきた。

しかし、1980年代以降の歴史地理学における城下町研究はやや下火になった感があり、それとは対照的に隣接分野での研究の進展は著しい。さらに城下町研究と絵図研究の共時的な動向も、1980年代以降弱まっている印象があり、背景には絵図の利用に関する一種の行き詰まりがあるように思える。

本稿は、こうした現況をふまえて、城下町研究の一層の進展を図るべく、城下町絵図に関する新たな研究視角について検討することを目的としている。これに向けて、まず、城下町絵図研究の流れをみていきたい⁴⁾。これまで城下町研究について整理した例は多い

キーワード：城下町絵図研究、城下町研究、大名、城下町プラン

が、絵図そのものに着目した研究の動向を追跡した例は意外にもなかったように見える。研究史を概観することで、現況における問題点の抽出を図り、その後の議論につなげたい。

隣接分野でも城下町絵図を一般的に利用するようになっている近年、基本史料である城下町絵図を再考することにより、新たな研究の可能性とその有効性を模索することとした。

II. 従来 of 城下町絵図研究

本章では、城下町絵図について、従来どのようなアプローチがなされてきたのかを概観するため、これまでの城下町絵図研究についてみていきたい。

初期の城下町絵図研究は、絵図のトレース図の作成から始まったと言っても過言ではない。名古屋市史の地図編として、城下町絵図のトレース図が作成されたのは1915年のことであった⁵⁾。この当時、主な中心都市の母胎である城下町に対して、その歴史的な景観や構造に着目する動きが起きつつあった中、それらを可視化する城下町絵図へ関心が寄せられたのは当然の流れであった。そこで、散在する絵図の蒐集が各地で開始された。ところが、ようやく絵図の所在を確認し個人宅を訪れても、所蔵者の意向や閲覧場所の確保といった問題から一見することも容易ではなく、また専門機関であっても巨大な大きさの絵図に対応できる閲覧環境が整っていない場合も多かった。したがって、その複製を作成し、利用の便を高めることが先に求められたのである⁶⁾。この時期の状況は、城下町絵図研究の推進者の1人である松原信之の自序にみることができる⁷⁾。「私は何時とはなく都市の型態変遷に興味を覚えるようになり、「城下町の研究を志すようになって」「古地図の整理研究をはじめた。併しいづれも何畳敷かの広さをもつ大絵図ばかりなので、之を資

料として実用に供し得るように縮少することが第一の仕事だと気づいた」と述べているとおりである。

こうした状況下において、1936年の阿刀田令造の仙台城下町絵図に関する研究は、仙台城下町絵図の復刻にともなう解説として発表された⁸⁾。25点の絵図一点一点について、記載情報や形式を検討したほか、作成年代や作成者に言及し、絵図の書誌学的検討をおこなった点で、城下町絵図研究の先駆と言ってよい。その後、1953年に村上節太郎⁹⁾、1957年に松原信之¹⁰⁾、1960年には池田四郎¹¹⁾によって研究の蓄積をみせた。これらにみる共通の調査項目は、次の3点である。

1. 絵図の現存状況
2. 絵図の作成（景観）年代
3. 絵図の記載情報・描写内容（裏書や付記も含む）

以上の項目は、いずれも絵図の位置づけを行う際の基礎をなすものである。同時にこれらは当時の研究スタイルにおいても必要不可欠であった。村上の研究は、年代ごとに並べた松山の城下町絵図一点一点についてその書誌情報に言及しているが、主眼は絵図に表現された松山の景観や構造を詳述することであり、最終的には松山の都市的な変容を明らかにすることを目指している。このスタイルは佐賀の絵図を扱った池田についても概ね同様である。すなわち、初期の城下町絵図研究は、当該都市の母胎としての城下町から現在に至るまでの変遷を復原するための補助的研究として、その意義を見出していた。

とはいえ、上記の研究は城下町研究に主眼があった当時において、絵図そのものにも注目した数少ない例であった。

1970年代は、城下町絵図研究において重要な意味を持つ。くしくも1973年は、その後の絵図研究の方向性を決定づける2つの論文が発表される。

1つは矢守一彦による研究である。矢守は

城下町絵図を研究史料として利用するためには、まず書誌学的検討が不可欠であると説いた¹²⁾。同氏はこれまで進めてきた城下町プラン研究の過程で、城下町絵図それ自体の研究が必要であることを痛感する。当時、参照しやすい絵図のみを用いた研究や、上記の3項目についてさえ、十分に検討することなく進められた研究が多かったためである。史料吟味の必要性については、1984年に刊行された『古地図と風景』の中でもみられ、1973年以降、矢守はこの点を一貫して主張しつづけた¹³⁾。

こうした提言に刺激され、研究手法の見直しが図られた結果、1980年の後藤雄二¹⁴⁾、90年以降の関戸明子・奥土居尚¹⁵⁾、関戸明子・木部一幸¹⁶⁾、川名禎¹⁷⁾、渡辺理絵¹⁸⁾などによる城下町研究において、観点こそ異なるものの研究過程で扱う絵図の史料吟味に、より重点が置かれるようになった。

同年に発表されたもう1つの研究は、金沢を事例とした田中善男による地図史研究である¹⁹⁾。80頁を超える長大な論文は、まず、これまでの絵図の年代推定方法に関する問題提起から始まる。金沢の場合、寺社や建築物の建造年が絵図作成年の決め手とされてきたが、建造年を示す文献史料に問題がある場合もあり、絶対的な根拠とならないとし、今後は住人名の照合など多角的に推定する方法が望ましいとされた。このほか、有沢武貞の測量法や絵図作成機関への注目、絵図新調の契機などに関心が向けられる。また「系統」や「系譜」という用語が多用され、絵図間の系統関係の解明を目指しているとおり、城下町絵図を「地図史的に考察」した先駆的研究と位置づけられる。

1973年に絵図研究に着手した矢守も、やがて地図史的観点からのアプローチを行う。同氏は福井、金沢、熊本と事例を重ね²⁰⁾、最終的には諸々の城下町絵図にみられる一般性を抽出することによって、史料吟味の段階から

一歩進んだ「城下絵図史の方法」論を確立しようとした²¹⁾。

この動きを一層推進させたのが、1970年以降の自治体による絵図編の刊行である。福井²²⁾、金沢²³⁾、小浜²⁴⁾、津山²⁵⁾などで当地に現存する城下町絵図が網羅的に収集され、その概要が個別に報告されている。2000年に入り、自治体の財政悪化によってこの流れは弱まりつつも、2005年の『宮津市史 絵図編』²⁶⁾の発刊にみるように、絵図編の刊行にともなう地図史研究の動きは近年においてもなお続いている。

こうした地図史的観点からの研究では、初期の城下町絵図研究にみた1～3の項目に、以下の調査項目が新たに付加された。

4. 絵図の所在調査および原本確認
5. 絵図の作成年代・景観年代の再検討
6. 絵図の精度・縮尺
7. 城下町絵図の作成者・作成機関の考察
8. 城下町絵図の作成目的および利用状況への注目
9. 城下町絵図の作成過程
10. 城下町絵図の測量技術
11. 城下町絵図の系統関係の解明

4については今日では自明のことのようにされているが、1970年以前の研究では既知の絵図のみ対象とされることが多かった。近年では、国立公文書館内閣文庫や国文学研究資料館などのような絵図類を多く収蔵している専門機関に加え、遠方の所蔵機関も視野に入れた広域的な所在調査が進められている。また、5については、田中善男の提言に刺激され、絵図や絵図の袋に記された年代を鵜呑みにすることなく、多角的な視点から作成年代や景観年代の再検討が進められている。さらに近年では6にも重点が置かれている。金沢においては、絵図の縮尺検定方法が提案され²⁷⁾、福岡では絵図に描かれた東偏する方位線から、当時の測量精度を求める方法²⁸⁾が示されるなど、今後さらに絵図の書誌学的方

法論の整備が期待される。

また、7, 8, 9は従来、軽視されてきた観点である。筆者はこうした反省から近年、城下町絵図の利用や作成過程に関する分析を進めている。

以上のように、1973年以降の城下町絵図研究は2つの方向性をもって進められている。1つは城下町研究において、絵図を適切に利用するための史料吟味としての絵図研究であり、他方は地図史的観点からのそれである。絵図研究はいずれかの視座を明確化してアプローチしている例もあれば、両者をあわせ持って分析されている例もあり、研究者によってその立場は異なる。

1990年代以降の地理学においては、新たな分析視角の提案もみられる。小浜を事例に1つの城下町の絵図群に注目した金坂清則²⁹⁾や絵図数の乏しい地域では写図群も含めた研究の必要性を説いた大脇保彦³⁰⁾、大和郡山の町割図に着目し、その作成年代や作成過程を分析することで、絵図の分類方法を提示した土平博³¹⁾の研究などがそれにあたる。加えて、これまで研究の蓄積が乏しかった近世初期の城下町絵図に着目した水田義一³²⁾、平井松午³³⁾の研究も注目を集めている。このように城下町絵図研究は現在も確実に進展を遂げている。

Ⅲ. 従来 of 城下町絵図研究における諸課題

1970年代以降の城下町絵図研究は、史料吟味としての絵図研究と城下町絵図史の解明に重点を置いた絵図研究の2方向から進められている。ここでは、両者の絵図研究における諸課題について考えていきたい。

第1の史料吟味としての絵図研究は、1973年以降、本格的な始動をみる。この種の研究は、絵図自体の考察を含んでいるとはいえ、城下町研究への利用を目的としているため、絵図の分析視点も必然的に各研究者の関心や視座に左右されることとなる。

先述のとおり、1970年以降の歴史地理学における城下町研究は低迷期を迎えるが、90年代に入り、やや活発化する動きがみえる。

そこでは、次の研究テーマがみられる³⁴⁾。第1は従来、研究対象とされることが少なかった小城下町と陣屋町に関する研究である。矢野司郎³⁵⁾、土平博³⁶⁾、渡邊秀一³⁷⁾によって主に進められているこのテーマは、地域構造のほか、陣屋と町の形態分析、小城下町と陣屋町の定義などが議論され、着実な進展がみられる。第2は、城下町プランの再検討である。歴史地理学における城下町研究の柱である城下町プランは、事例の積み重ねによってその一般化に成功したが、個々の事例は必ずしも深められているとは言いがたい。関戸明子ら³⁸⁾、中西和子³⁹⁾、渡邊秀一⁴⁰⁾による研究は、この点に意義がある。第3は、矢守が対象としなかった特殊な城下町についての研究である。川名禎は、城下町の都市形態について、従来その共通性のみが強調されてきたことを指摘し、特殊とみられてきた中にこそ近世城下町の本質を見出すことができるとして分散城下町の空間構造を明らかにした⁴¹⁾。

以上にみた90年代以降の城下町研究には、城下町プラン論の再考あるいは再構築の試みという観点を共通して見出せる。90年代以降、隣接分野から城下町プラン論の問題点が指摘されている中、それに応えるべく歴史地理学において城下町プラン論の再検討を行う動きが強まっている。

一方で、隣接分野における近年の城下町研究は、城下町プラン論のような巨視的な空間構造の把握から、城下町の細部に着目した内部構造の捕捉・変容に焦点をシフトする動きも同時に進んでいる。こうした動きにも対応するような絵図の分析手法や研究視点が求められていることも忘れてはならない。

つぎに、城下町絵図史の解明に重点を置いた絵図研究について考えてみたい。この種の研究において、解明すべき課題の1つとして

設定されてきたのが、前節の11にあげた城下町絵図の系統関係についての分析である。絵図の系統関係を示した系譜図は、個々の絵図について、前節1～10までの調査項目を精査した上で作成できるものであり、この点で当該の城下町絵図史を集約したものといえよう。

問題は、こうした精緻な分析作業の先にごのような展望を見出せるかということである。言いかえれば、絵図間の関係性を明確化する作業から新たな研究視角が見出せないだろうか。現況では個々の城下町の絵図史を積極的に発展させた研究例は少なく、同じ城下町に関する絵図群を対象とした研究の蓄積もあまりみられない。しかし、この種の研究はもっとも進展が顕著であり、成果の蓄積も大きい。もし、その成果が城下町研究に還元できれば、両者の共時的進展がふたたび可能となろう。

以上、2つの方向性における城下町絵図研究の課題をふまえて、つぎに新たな城下町絵図の分析視角とその有効性について検討したい。それは、城下町絵図研究と城下町研究との連動を目指す試みである。

IV. 城下町絵図と絵図に描かれた社会

城下町絵図の系統関係の究明は、言いかえれば、城下町絵図の特徴を経時的に分析し、時間軸の中に個々の絵図を当てはめていく作業である。いわば、一城下町における断続的な時の断面(城下町絵図)を、ある基準に基づきながら積み重ねる作業であり、1970年代までのダービー流の景観変遷史的アプローチにおいて用いられた研究手法と通じる。

ところで、積み重ねられた絵図を精査すると、同系統の絵図群あるいは同時期に作成された絵図間でさえ、記載内容は様になく、特定の情報や図像のある絵図とそうでないものがあることに気付く。こうした差異は、絵図の作成目的や主題と関連しており、絵図の

利用状況の解明につながる手掛かりとして注目される。個別の城下町絵図が、当時、どのように利用されていたのかについて明らかにすることは容易ではないが、現用資料としての絵図という観点には、城下町絵図の新たな研究視角が内包されていると考える。

絵図の描写内容や記述を詳細にみていくと、当時の絵図の現用状況を垣間みることができる。

たとえば、米沢については明和期のほぼ同時期に作成された2種類の城下町絵図が現存する。いずれも藩作成の屋敷割図であり、形式、色彩、記載内容は酷似しているが、一方にのみ転宅を示す夥しい貼紙が付されている。また文政期以降の絵図には複数の屋敷に赤丸が付せられている。これは家屋が建造されていない屋敷地を示す。こうした絵図群は家臣の屋敷管理を担当した屋敷割役が使用した絵図であった。

熊本の城下町絵図には、宝暦期以降、屋敷地の間口・奥行が記入されはじめる。すなわち屋敷面積の把握が行われるのである。その後、算出された面積にしたがい、規定以上の広さを持つ屋敷のみ色分けされ、「地子・過坪地子」の屋敷として図示されていく。

絵図に残された図像や文字情報の中には、現用資料としての絵図の性格を示す内容が含まれていることがある。これらに注目することで、城下町絵図群を利用主体にそって再分類することも可能となろう。そこでは、現用資料化した絵図群を前に、なぜそのような絵図利用が必要であったのかについて明らかにすることが求められる。当然、その過程では当該社会の政治的・社会的背景に触れることとなり、結果的に絵図から、これまで抽出できなかった都市社会像の一面を浮かびあがらせることも可能となろう。もし、この種の絵図が多時点で現存すれば、そこからみえてくる都市社会像も多くなる。すなわち、現用資料としての城下町絵図群という系統を見出

し、それらの絵図から、都市社会の実像を長期的に抽出するのである。筆者はかつて米沢を中心事例としながら、必要に応じて熊本の事例も交えつつ、こうした分析の有効性を検証した⁴²⁾。

このようなアプローチは、近年、歴史地理学以外の隣接分野でもみられる。一例として、日本史学および建築史学からの研究の進展が著しい萩をみてみたい。

森下徹は、安政期と弘化期の城下町絵図を使って、武家地1町の住人名の異同を検討し、そこから屋敷の流動性の高さについて明らかにする⁴³⁾。同氏はつぎに絵図上で拝領者が不明な屋敷地には、「某」「某舎」「某抱」という3種類の記載があることに着目し、「某」「某舎」は屋敷主が現住する屋敷、一方、「某抱」は現住していない屋敷であることを見出し、屋敷の利用状態に応じて、用語の使い分けがなされていることを指摘する。つづいて「某抱」が半数を超える地区さえあったという事実を見出し、その成因を探る。寛文期と天和期の城下町絵図まで遡り、それらの記載内容を確認した上で、天和期の武家地でみられた不正な屋敷利用の実態にアプローチし、その際の萩藩の対応も合わせて検討した。藩は管理体制の強化を図るため、屋敷方の手により屋敷の掌握を目指すために城下町絵図を作成したこと、その後も現況把握のために断続的に絵図作成を進めたことが明らかにされた。

森下の研究は、一見すると見落としがちな絵図の記載内容について、丁寧に解釈して得られた成果である。それゆえ、絵図の分析と絵図に描かれた社会の考察が連動している点で、得られた知見は説得力を持つ。

こうした分析手法は、これまでの城下町絵図研究の中で意外にもなかったように思える。なぜならば、城下町絵図を中心史料としてきた城下町プラン論では、城下町の空間構造における一般性を見出すために、どの城下

町絵図にも描かれる城郭や堀割、各土地利用といった共通項に着目する必要があった。また、地図史的な絵図研究では、絵図間の系統関係を地図発達史的観点によってとらえてきた。もちろん、そこでは絵図の主題についても当然、関心が払われてきたが、利用上における絵図の主題は、当初の作成目的と異なっている場合も少なくない。このため、絵図の発達をみていく際に、その利用方法や転用後の絵図については必ずしも関心が払われなかった。

現用資料としての絵図は、利用主体が何らかの具体的な目的のために、文書ではなく、絵図を用いる必要があったことを示している。上記の例では管理や把握のために、空間的な位置情報が必要とされたわけである。この点への着眼は、城下町絵図という歴史史料を地理学的に解釈することに他ならず、まさに歴史地理学的な分析手法と位置づけられよう。

こうした着目から都市社会史へ発展させる手法は、同時に城下町の空間構造を変容させた内部社会からの原動力や近世社会に果たした城下町絵図の役割について考える際にも示唆に富む。

もちろん、現用状況がわからない城下町絵図も多く、どの城下町絵図についてもこの手法が有効とは限らないが、重要なことはこのような観点で絵図を再検討するという姿勢である。絵図研究について、一定の蓄積をみた現段階において、多角的な視野から再度絵図群を見直すことも有効であろう。この試みは城下町絵図を対象とした絵図解説研究へつなげる可能性をも有している⁴⁴⁾。

V. これからの城下町絵図研究

— 大名家に注目した城下町絵図群 —

近年、自治体史の編纂や博物館の展示などにおいて、絵図は不可欠な歴史史料となり、地域住民の高い関心を呼んでいる。新出の城

下町絵図はさらに増え、絵図史料のデジタル化と相俟って、絵図の調査環境も以前より改善されつつある。

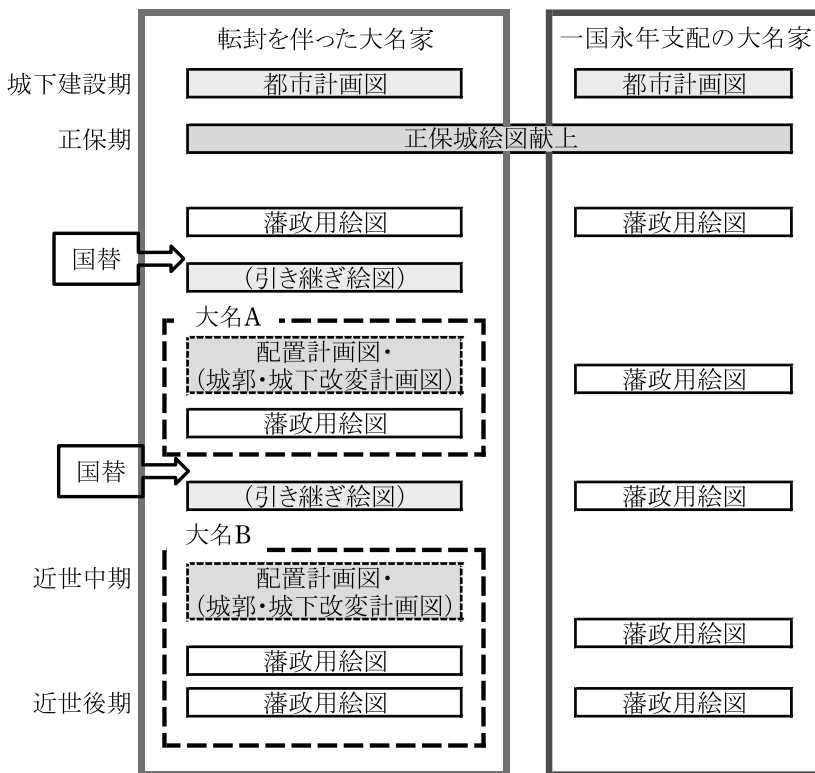
本章ではこうした状況をふまえつつ、城下町絵図の作成と絵図に与えられた役割にアプローチするために、絵図群の新たな分類試案について検討したい。

前章では城下町絵図の理解を深化させるために、現用資料としての絵図の主題解読が重要であることを指摘した。こうした分析視点は、多くの城下町絵図の観察の上に見出したものであるが、その過程で一国を永年支配していた外様大藩のような大名家と、転封を経験した譜代・親藩のような家では、絵図の役割や作成状況に違いを来している様相が確認できた。

たとえば、城下町絵図の作成機会を例にして両タイプの違いについて概観したい。図1はその流れを簡略化した模式図である。

城下町建設期において、城下町設計図あるいは都市計画図のような絵図がどの大名家でも必要であったにちがいない。ただし、この種の絵図の現存数は極めて少ないため、議論の対象となることは少なかった。この点で、近年の水田義一による松江⁴⁵⁾、および平井松午の徳島藩⁴⁶⁾を事例とした分析は、いずれも都市計画図としての性格を有した絵図の分析であり、新たな領域を開拓する研究として関心が寄せられる。

正保期になると、正保国絵図の作成と並行して正保城絵図の献上という城下町絵図史上、1つの画期ともいえる大事業が各藩にお



() は、場合によって作成された絵図。

図1 2タイプの大名家にみる城下町絵図の作成機会

いて行われる。

その後、永年支配の大家における城下町絵図は、巨視的には藩政用絵図に特化していく傾向を見出せる。もちろん、時には秋田⁴⁷⁾、米沢⁴⁸⁾、萩⁴⁹⁾などでみられるように幕府役人への献上用として絵図を提出した例があるものの、城下町絵図は藩主用であれ、実務役人用であれ、何らかの形で藩政に供せられたと考えられる。新絵図の調進は、前絵図と現状との齟齬が大きくなった場合や絵図の痛みが著しくなった際、あるいは管理政策上の必要性が高まった時に行われたのである。

他方、藩主交代をともなう譜代藩・親藩タイプの大家の場合、領地替を命じられた大名は、新しい城下町への移動にむけて、移転前から新領地の調査を開始する。城郭内の構造、家臣の屋敷数やその規模は藩主のもっと

も高い関心事であったと考えられる。転封にともなう引継文書に注目してきた谷口昭によれば、旧城主から新城主に引き継がれる記録の中には、慣例として城下町絵図も含まれるという⁵⁰⁾。管見でも旧藩主板倉氏と新藩主戸田氏との間で引き継がれたとみえる鳥羽の例が確認できる⁵¹⁾。

つぎに、新領主は転地の城下町整備に着手する。絵図を必要とするのは、城下町内に家臣団を配置する際である。そこで、配置計画図の類が作成される。これは、新たに絵図を作成する場合と西尾藩⁵²⁾や岡山藩のように引き継いだ城下町絵図を利用して、絵図上に名札を貼付し、屋敷の割り当てをしている例があった(図2「岡山古図」(寛永9年)岡山大学附属図書館蔵)。

さらに、領主の高が異なって移封された場

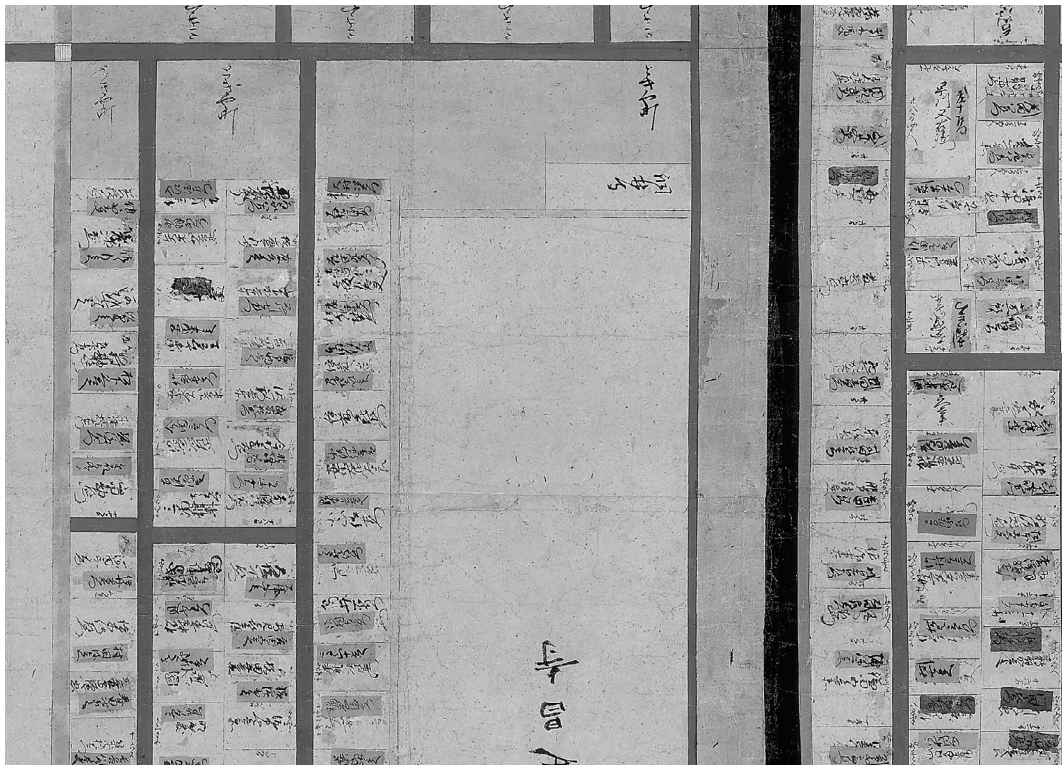


図2 「岡山古図」(寛永9年)部分 池田家文庫T6-5 岡山大学附属図書館蔵

もとの絵図には、池田忠雄時代の家臣名が記載され、その上に池田光政時代の家臣名が貼紙されている。

合は、城郭および城下の再整備が必要となる。その際は、幕府へ届け出て許可を要した。このため、城郭・城下改変を決定した大名家は、幕府へ献上するための重要性の高い絵図を作成する。城郭修築願の付図としての絵図は各地に残されているが、ここでは城郭のみならず都市域の改変まで行う場合に作成された絵図に注目したい。したがって、転封を経験した全大名家がこうした絵図を作成したわけではない。たとえば献上図の控えが現存している拳母藩内藤家⁵³⁾(図3「三河国拳母城築絵図」(寛延3年)豊田市教育委員会蔵)や越前勝山藩の小笠原家⁵⁴⁾などは、入部前の城下町に城郭がなく、陣屋のみ置かれ

ていた。また家臣団の規模も異なっていたため、武家地の造成を必要としたのである。

その後、同大名家による領地統治が長期間続くと、城下町経営が始まり、藩政用絵図の必要性が高まっていく。一般的に、永年支配の大名家の藩政用絵図はいわゆる屋敷割図を想定するが、転封をともなった大名家の中には、その様相を異にしている例がある。

藩主交替が著しかった館林の場合、秋元家が入部する前の弘化2年以前に作成されたとされる屋敷割図(図4「館林城屋敷割図」館林市立資料館蔵)が残されている。本図が秋元家に伝来したことは、前藩主から引き継いだ可能性を示唆する。この絵図の屋敷地内に

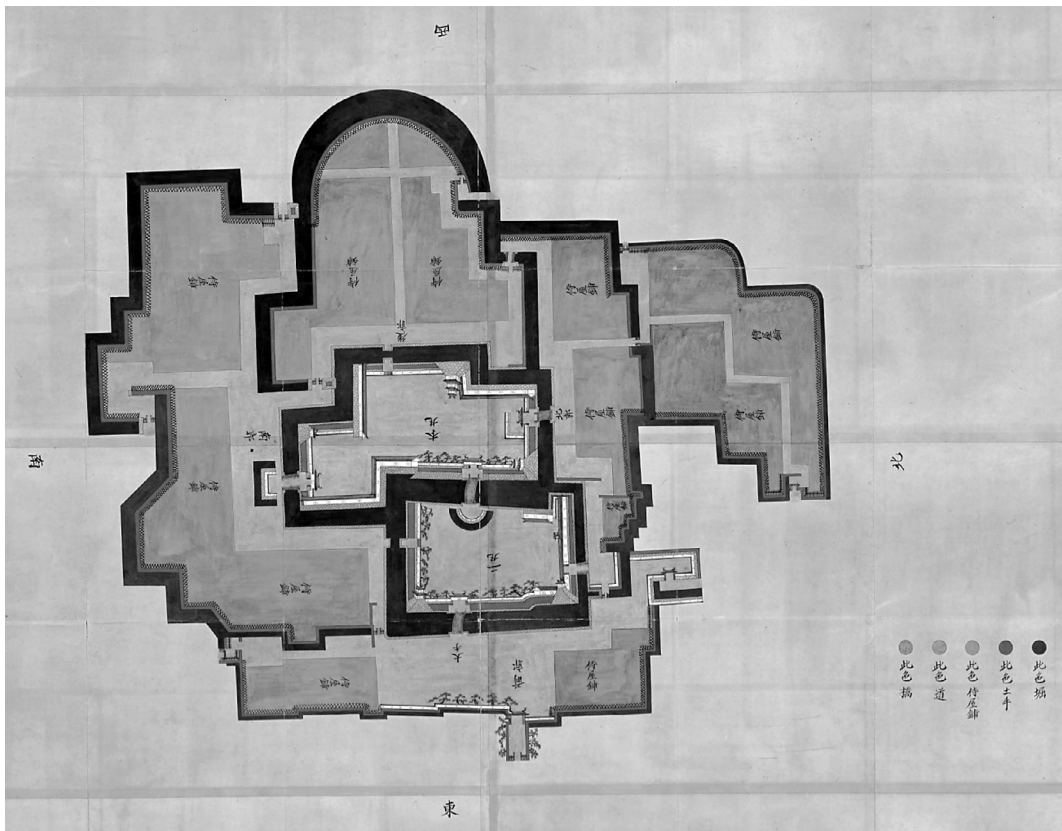


図3 「三河国拳母城築絵図」(寛延3年)部分 豊田市教育委員会蔵

内藤政苗により幕府に提出された計画図の控図。中央に城郭を、その周辺に堀で囲まれた武家地が造成される予定であったが、矢作川の相次ぐ氾濫によって築城地の移転を余儀なくされた。

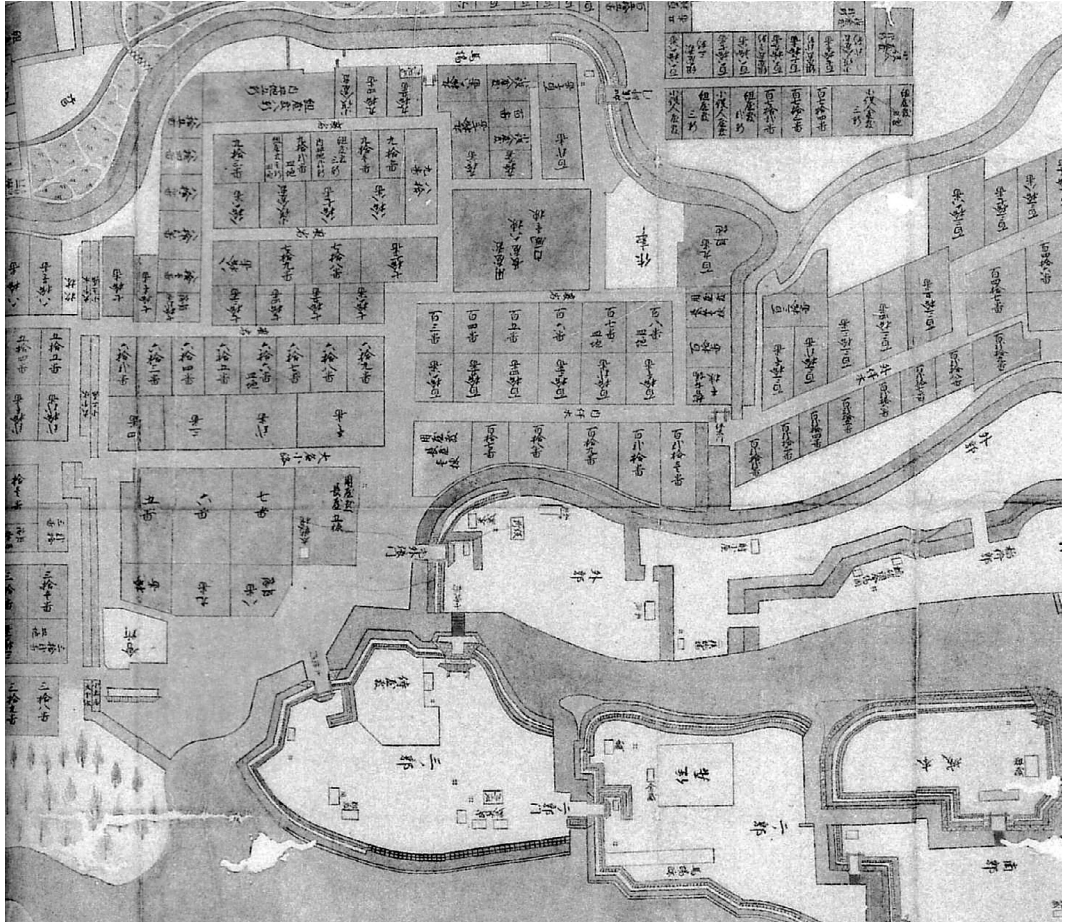


図4 「館林城屋敷割図」部分 館林市立資料館蔵

景観年代は、秋元志朝入封以前（弘化2年以前）とされる。武家地には屋敷番号が記される。

は、拝領者名の代わりに「壹番」「貳番」と屋敷番号が記載されている。その様相は、近代の地籍図のようであり、こうした絵図は写図も含めて複数伝来している。この種の絵図と対応するかのように、秋元家入封後の館林では、「館林藩士住宅図面」（図5）が作成された。これは、藩士宅の間取り図であり、長屋や番所も含んでいる。建坪、畳数が記されるほか、拝領者自身がその屋敷に手を加えた場合は「自分手入」として、変更部分を朱書きされた。居住者の変更は、新居住者名を紙片に記して貼付するだけで済む。本来、藩の管理用として全家臣の住宅図面が作成された

とみられるが、現存数は約50軒についてのみである。

こうした住宅図面の作成は、転封をともなった大名家においてみられる。そこでは再度の国替の可能性を視野に入れた屋敷管理が遂行されていたのであろう。類似の例は姫路でもみられ、屋敷内の建具まで把握、管理されている⁵⁵⁾。

以上のように2つのタイプの大名家に則して近世の城下町絵図作成の契機に言及した。この分類は試案の段階であり、さらなる深化を要するものの、以下のような新たな研究テーマの創出が期待できる。

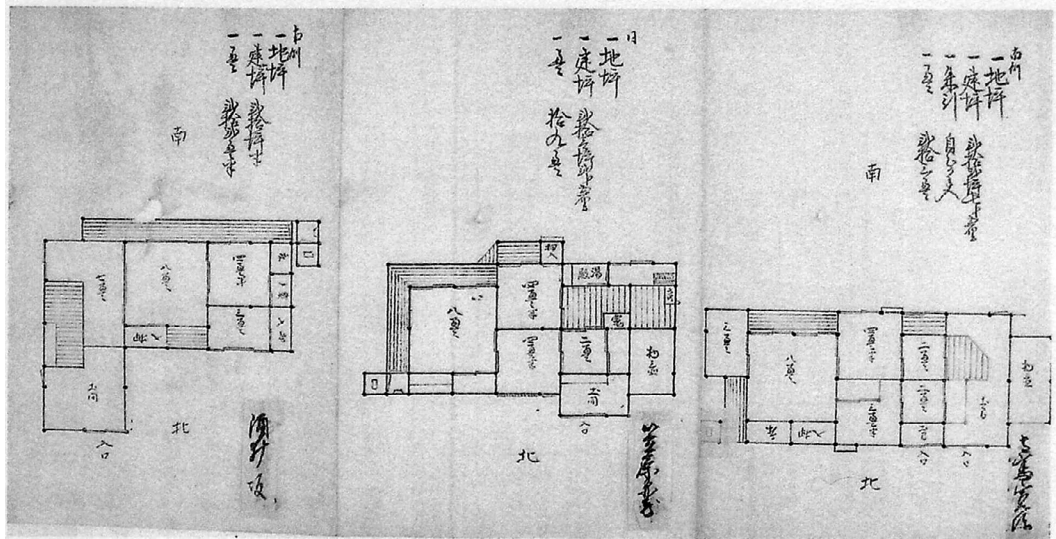


図5 「館林藩士住宅図面」一部 館林市立資料館蔵
秋元志朝時代（弘化2年に作成されたとされる住宅図面）

第1は、大名家の絵図史料群についての分析である。藩政の違いから大名家が作成した、あるいは引き継いだ絵図群には違いを見出せる。転封をともなった大名家の場合、旧封地の藩政文書が欠落する場合も多いが、大給松平氏のように、遠江国浜松、上野国館林、下総国佐倉、肥前国唐津、出羽国山形、三河国西尾といった封地ごとの城下町絵図がそれぞれ現存している例もある⁵⁶⁾。このように、大名家の性格や規模の違い、新旧の封地の関係という視点から、絵図作成の契機や絵図の役割について検討することが求められる。

第2は、城下町改変にともなう城下町プランの変容に関わる視点である。近世期、多少の変動はあれ、300にちかい数の城下町があった日本で、矢守は城下町プランの総郭型から内町外町型への移行例として12の城下町をあげている⁵⁷⁾。このうち8例は転封を契機とした城下町改変であった。矢守はこの点に言及することを控えたが、近年、関宿城下町を分析した川名禎⁵⁸⁾は、空間構造の変化が相次ぐ大

名家の転封に起因するとしているように、城主交替の顕著な城下町の絵図研究は、既存城下町に入封した各大名家の、城下町改変にともなうプラン選択を考える際にも示唆に富む。城下町プラン論については、先述のとおり、近年、再考・再構築を求める動きが高まっており、こうした分類を視野にいれた城下町絵図研究も有効であろう。

VI. むすびに

従来、城下町絵図の利用に関する方法論の見直しは、城下町研究の転換期に行われてきた。本稿は、近年にみる城下町研究の新しい動きをふまえて、これまでの城下町絵図研究の歩みを通して、新たな分析視角と課題を提示した。これらはいずれも未成熟な提起であり、諸方面からの厳しい指摘が予想されるものの、本稿が叩き台となり、研究の進展に少しでも貢献できれば幸甚である。

最後に、本論で取り上げることはできなかったが、城下町絵図研究として再考を図るべきもう1つのテーマについて触れておきた

い。それは江戸時代における手書き都市図に関する研究である。筆者はかつて、大坂の手書き都市図である「大坂三郷町絵図」について若干の史料調査および書誌学的検討を行ったことがある⁵⁹⁾。近年では、鳴海邦匡によってさらに多くの「大坂三郷町絵図」の所在が明らかにされ、研究の深化が図られている⁶⁰⁾。

他方、江戸については飯田竜一・俵元昭による『江戸図の歴史』・別冊『江戸図の歴史【別冊】江戸図総覧』⁶¹⁾という代表的な江戸図研究の著作があるが、これらが刊行されて20年以上経過した現在、新出の手書き江戸図や板行図の発見も少なくない⁶²⁾。また高精細画像の提供や巨大な江戸図の復刻刊行⁶³⁾といった研究環境の変化から、とくに手書き江戸図については重要な成果が報告されている⁶⁴⁾。

手書き江戸図については、個人で行える研究の域を超えており、今後、問題の所在や分析視点の整理、研究手法の確立を図りながら、学際的な研究としての取り組みが待たれる。

(日本学術振興会特別研究員[PD]・筑波大学)

〔付記〕

本稿は、第52回歴史地理学会大会シンポジウムにおける口頭発表「城下町絵図をめぐる近年の研究動向と諸課題」の内容をもとにしている。発表後は、土平博先生、古田悦造先生などをはじめ、諸先生、諸学兄から貴重なコメントをいただいた。また、藤田裕嗣先生には絵図の所在に関する情報の提供を受けた。絵図の閲覧については、岡山大学附属図書館、豊田市郷土資料館、勝山市教育委員会、館林市史編さん委員会などをはじめとした関係機関の皆様は大変お世話になった。末筆ながらこれらの方々より御礼申し上げます。

〔注〕

- 1) 織田武雄「地図と歴史地理 序」(歴史地理学会編『地図と歴史地理』、歴史地理学会、

1979)、1～2頁。

- 2) 長谷川孝治・小野田一幸「(シンポジウム趣旨説明)「歴史地理学における絵図・地図」によせて」、第52回歴史地理学会大会予稿集、2009。
- 3) 城下町絵図とは一般的に城郭を中心に、武家地・町人地・寺社地など都市域を描いた近世絵図の1つである。城下町絵図は城下絵図とも称され、現在のところ、両者は明確に区分されていない。また、各藩が幕府の命により正保国絵図とともに作成した「正保城絵図」もまた、城郭のみならず都市域まで含んでいるため、城下町絵図の一種とみなせるものの、それらは城郭絵図と称される場合もあり、城下町絵図についての呼称は研究者によって異なる状況にある。
- 4) 城下町絵図そのものに着目した研究は、歴史地理学のみならず、歴史学、建築史学においても蓄積がみられる。とくに建築史学による個別の絵図分析事例は枚挙にいとまがない。そこで、本稿では主に歴史地理学からのアプローチに焦点をあて、必要に応じて隣接分野の研究事例についてもとりあげることとしたい。また、本稿では後述のとおり、陣屋から城郭の建設を経て城下町に移行した例について絵図を伴いながらとりあげている。このため、研究史の概観も必要に応じて陣屋町・小城下町を範疇に入れて論じることとした。
- 5) 名古屋市役所『名古屋市史 地図』、名古屋市、1915。4分割にされた「元文三年名古屋圖」をはじめとして7枚の絵図(城郭のみの図もあり)のトレースが挿入されている。本市史に解説編は付されなかったものの、これらの多くが個人所蔵の絵図であったことから、当時の所蔵調査の困難さをうかがい知れる。また「尾府全圖」は17分割されており、原図の大きさが想像されるとともに、復刻の困難さも示唆される。
- 6) こうした動きは、他の研究分野でも同様であった。たとえば、村落社会の分析を基底として歴史学研究を推進させた木村礎は、村落景観の復原を目指して、絵図の収集から開始し、村絵図や地籍図のトレース図の

- 作成を進めた。木村礎『村落景観の史的研究』、八木書店、1988。
- 7) 松原信之『若越城下町古図集 解説書』、古今書院、1957、6～8頁。
 - 8) 阿刀田令造『仙台城下絵図の研究』、財団法人斎藤報恩会、1936、1～134頁。
 - 9) 村上節太郎「古地図からみた松山城下町の研究」、伊予史談134、1953、9～22頁。同「重信の計画した松山城下町の変容—古地図から見た—」、伊予史談216、1974、42～111頁。
 - 10) 前掲7)。
 - 11) 池田史郎「佐賀城下町の古地図について」、歴史教育8-12、1960、63～70頁。
 - 12) 矢守一彦「米沢城下絵図について—地図史的考察の試み」、史林56-2、1973、285～303頁。
 - 13) 矢守一彦『古地図と風景』、筑摩書房、1984。
 - 14) 後藤雄二「仙台の城下絵図について」(西村嘉助退官記念事業実行委員会編『西村嘉助退官記念地理学論文集』、古今書院、1980)、596～601頁。
 - 15) 関戸明子・奥土居尚「高崎城下の形成過程と地域構成」、歴史地理学38-4、1996、1～19頁。
 - 16) 関戸明子・木部一幸「館林城下町の歴史の変遷と地域構成」、歴史地理学40-4、1998、19～38頁。
 - 17) ①川名 禎「二王座村絵図にみる白杵城下の景観と地域構成」、地図44-3、2006、1～18頁。②同「分散城下町の成立とその統合原理—下総国関宿城下町の復原を通じて—」、歴史地理学50-5、2008、23～42頁。
 - 18) 渡辺理絵「米沢城下町における拝領屋敷地の移動—承応・元禄・享保の城下絵図の分析を通して—」、歴史地理学42-2、2000、23～42頁。
 - 19) 田中善男「城下町古図について」、金沢経済大学論集7-1、1973、1～62頁。
 - 20) 矢守一彦「福井城下絵図史について」(藤岡謙二郎先生退官記念事業会編『歴史地理研究と都市研究』、大明堂、1978)、238～247頁。同『御次御用金沢十九枚御絵図』とその作成過程について、人文地理31-1、1979、77～88頁。同「金沢城下絵図史について」、史林62-3、1979、111～134頁。同「熊本城下絵図史について」(水津一郎先生退官記念事業会編『人文地理学の視圏』、大明堂、1986)、307～318頁。同『個別城下絵図史の調査とその比較研究 昭和60年度科学研究費補助金(一般研究C)研究成果報告書』、1986、79～99頁。
 - 21) 矢守一彦「城下絵図の類別—とくに藩用図について」(藤岡謙二郎編『城下町とその変貌』、柳原書店、1983)、29～40頁。
 - 22) 福井県編『福井県史 資料編16上 絵図・地図複製図・解説・解説』、福井県、1982。
 - 23) 金沢市史編さん委員会編『金沢市史 資料編18 絵図・地図』、金沢市、1996。
 - 24) 小浜市史編纂委員会編『小浜市史 絵図地図編』、小浜市、1998。
 - 25) 津山市教育委員会編『津山城 資料編』、津山市教育委員会、2000、1～19頁。同『津山城 資料編 II』、津山市教育委員会、2001、8～25頁。
 - 26) 宮津市史編さん委員会編『宮津市史 絵図編』、宮津市、2005。
 - 27) 前掲23)。
 - 28) 小林 茂「福岡藩の元禄期絵図の作製方法と精度」(小林 茂・磯 望編『福岡平野の古環境と遺跡地—環境としての遺跡との共存のために—』、九州大学出版会、1998)、259～274頁。
 - 29) 金坂清則「小浜城下町絵図誌考」、地図情報12-1、1992、19～25頁。
 - 30) 大脇保彦「高知城下町絵図について—歴史空間の情報源としての吟味と課題—」、土佐女子短期大学紀要8、2001、71～82頁。
 - 31) 土平 博「和州郡山城下「町割図」の作成年代」、奈良大学地理学研究報告24、2000、73～90頁。同「近世郡山城下の「町割図」とその分類」(城郭談話会編『大和郡山城』城郭談話会、2009)、239～251頁。
 - 32) 水田義一「計画図としての城下町絵図—堀尾期松江城下町絵図—」、歴史地理学50-4、2008、75頁。
 - 33) 平井松午「近世初期城下町の成立過程と町

- 割計画図の意義—徳島藩洲本城下町の場合—, 歴史地理学51-1, 2009, 1~20頁。
- 34) ここでは城下町絵図類の利用がみられる主な研究に限定する。このほか、近年の城下町研究として、城下町の祭礼に注目した渡辺康代による研究が注目される。渡辺康代「近世城下町における祭礼形態の変容—下野国那須郡烏山を事例として—」, 地理学評論72-7, 1999, 423~443頁。同「宇都宮明神の「付祭り」にみる宇都宮町人町の変容」, 歴史地理学44-2, 2002, 25~44頁。同「近世城下町桑名における祭礼の変容—住民の生活文化としての祭礼へ—」, 歴史地理学48-4, 2006, 1~18頁。
- 35) 矢野司郎「陣屋町の形態と構造について—近江高島郡大溝陣屋の場合—」, 歴史地理学紀要31, 1989, 153~168頁。
- 36) 土平 博「大和国田原本陣屋町の地域構造」, 歴史地理学155, 1991, 1~21頁。同「大和松山藩織田氏の廃絶に伴う居館・侍屋敷地区の耕地化」, 歴史地理学36-5, 1994, 19~33頁。同「近世における藩の飛地領と陣屋—美作国・越後国・陸奥国を事例として—」(関西大学文学部地理学教室編『地理学の諸相—「実証」の地平—』, 大明堂, 1998), 128~147頁。同「大和国芝村藩の藩領と陣屋形態」, 総合研究所報10, 2002, 17~29頁。同「近世美作国における飛地領の変遷と陣屋」, 奈良大地理8, 2002, 12~27頁。同「近世陣屋と町の形態に関する再検討—陸奥国南部を事例として—」, 奈良大学紀要37, 2009, 65~83頁。
- 37) 渡邊秀一「小城下町研究の問題点と可能性」, 立命館地理学9, 1997, 55~66頁。同「山間小城下町の地域構造—備中国川上郡成羽の場合—」, 歴史地理学40-3, 1998, 23~41頁。同「江戸時代初期の成羽の町屋地区—とくに古町の形成時期をめぐって—」, 立命館地理学10, 1998, 23~36頁。
- 38) 前掲15), 16)。
- 39) 中西和子「藤堂高虎の城下町建設にみる織豊期城下町プランの受容と展開」, 歴史地理学42-5, 2000, 23~40頁。同「織豊期城下町にみる町割プランの変容—タテ町型からヨコ町型への変化について」, 歴史地理学45-2, 2003, 25~46頁。
- 40) 渡邊秀一「越前鯖江における武家地の形成—新規城下町の御用地引上げから—」, 文学部論集(佛教大学文学部)90, 2006, 63~77頁。
- 41) 前掲17) ②。
- 42) 渡辺理絵「城下町絵図の様式変化と武家地管理の展開—米沢藩を例にして—」, 人文地理55-3, 2003, 1~23頁。同『近世武家地の住民と屋敷管理』, 大阪大学出版会, 2008, 19~61頁所収。
- 43) 森下 徹「武士の周縁に生きる—萩城下と家臣団—」(森下 徹編『武士の周縁に生きる』, 吉川弘文館, 2007), 204~241頁。このほか、城下町絵図を用いた分析に妻木宣嗣・松永 理・曾我友良・橋本孝成があげられる。妻木らは、まず、山口県内外に残る20点の城下絵図を調査し、描写内容や景観年代に関する史料吟味を行った上で、慶安期と寛文期の城下町絵図を対比し、空間構造の変化を指摘する。妻木らはその変化の要因を藩の武家屋敷行政の政策転換に求めた。松永 理・橋本孝成・曾我友良・妻木宣嗣「萩城下絵図の年代に関する基礎的考察—萩藩役人帳を素材に—」, 平成18年度日本建築学会近畿支部研究報告論集, 2006, 785~788頁。妻木宣嗣・松永 理・曾我友良・橋本孝成「17世紀中期までの萩藩による武家屋敷行政における指導と実状—「屋敷方記録書抜」を素材として—」, 日本建築学会計画系論文集73, 2008, 1593~1600頁。
- 44) 小野寺淳は、地理学における絵図研究は、①地図史研究, ②景観復原研究, ③絵図解読研究の3つに分類することができ、概ね①→②→③の流れで絵図研究は進展していると、これまでの絵図研究を展望した。小野寺淳「景観論と絵図研究—絵図学構築のために—」, 国学院雑誌98-3, 1997, 67~78頁。同「近世絵図史料論の課題—国絵図研究会の活動を通して—」, 歴史学研究842, 2008, 25~32頁。
- 45) 前掲32)。
- 46) 前掲33)。

- 47) 秋田の「宝暦九年御城下絵図」は、前年に藩主佐竹義明が死去し、11歳の嫡子が後継したために幕府役人が派遣され、その折に作成されたものである。今村義孝「秋田」(原田伴彦・西川幸治編『日本の市街古図—東日本編』、鹿島研究所出版会、1973)、23頁。
- 48) 米沢の「享保十年城下絵図」は同年、幕府の国目付へ献上された絵図の控えである。国目付の派遣は、藩主宗憲がわずか8歳の幼少であったことによる。青木昭博「城下絵図の伝来と作製年代」(米沢上杉文化振興財団編『絵図でみる城下町よねざわ』、米沢市立上杉博物館、1992)、40~47頁。
- 49) 萩絵図(慶安5年)(毛利家文庫・絵図409)は、この前年に毛利千代熊が亡父の後を継いだことにより、状況視察のために幕府より派遣された国目付へ提出された絵図の控えである。
- 50) 谷口 昭「大名の領知と家産—城邑の引渡を中心の一」、名城法学42-1、1992、39~102頁、など。
- 51) 「鳥羽城之絵図」三重県史編さん室保管。
- 52) 西尾市史編さん委員会編『西尾市史史料Ⅱ 西尾城 城郭城下町』、西尾市、1971、114~122頁。同書の「西尾城郭城下町・遺址図10」に掲載された「藩主山形より国替之節屋敷割図」(明和元年)がそれにあたる。
- 53) 内藤氏が移封された当初、挙母には本多氏から引き継いだ陣屋があるのみであった。
- 54) 小笠原氏が移封された当初、勝山には城郭はなく、幕府代官使用の陣屋があるのみであった。
- 55) 永埜啓子「近世後期における姫路藩酒井家の家中屋敷地・居宅の再編成策について」、姫路市立城郭研究10、2001、39~60頁。
- 56) 大給松平氏は、岩村にはじまり、浜松、館林、佐倉(乗久時代)、唐津、鳥羽、亀山、淀、佐倉(乗邑時代)、山形、西尾と領知替を経ている。このうち、岩村、佐倉(乗久時代)、鳥羽以外は、各領地の城郭・城下絵図が現存している。これらは普請奉行の家に伝来したものである。
- 57) 矢守一彦『都市プランの研究—変容系列と空間構成—』、大明堂、1970。
- 58) 前掲17) ②。
- 59) 渡辺理絵「刊本以外の大坂図「大坂三郷町絵図」に関する書誌学的検討」、懐徳72、2004、18~31頁。
- 60) 鳴海邦匡「近世の大坂の地図に関するノート」、待兼山論叢(日本学篇)40、2006、13~33頁。
- 61) 飯田龍一・俵 元昭『江戸図の歴史』、築地書館、1988。同『江戸図総覧』、築地書館、1988。
- 62) 平成21年に東京都江戸東京博物館によって増補改訂された『館蔵地図目録1 江戸の地図』には、716点の江戸図(複製図も含む)の書誌情報が目録として整理されている。そこには『江戸図の歴史』に未掲載の江戸図も少なくない。その大半は板行図である。東京都江戸東京博物館編『東京都江戸東京博物館 調査報告 第20集 増補改訂版 館蔵地図目録1 江戸の地図』、江戸東京博物館、2009。
- 63) 榎之潮から近年、手書き江戸図の刊行が進められている。すでに刊行された江戸図に「明暦江戸大絵図」「寛永江戸全図」などがあり、前者は明暦大火後の江戸市中の情報をもとに、後者は市中縁辺部までを描いたもともとも古い手書き江戸図として、いずれも地図史上、重要な絵図である。両者には、日本史学・建築史学の研究者による詳細な解説が付せられている。最近では、遠近道印作「寛文五枚図」の原図とされる「万治年間江戸測量図」の発刊が進められている。いずれも高精細カラーでの復刻である。
- 64) たとえば、近年、その存在が明らかになった白杵市立白杵図書館蔵の「寛永江戸全図」は、江戸の全体図を描いた現存最古の手書き江戸図であることが判明した。この図については、榎之潮によって発刊された「寛永江戸全図」に付せられた金行信輔による解説に詳しい。